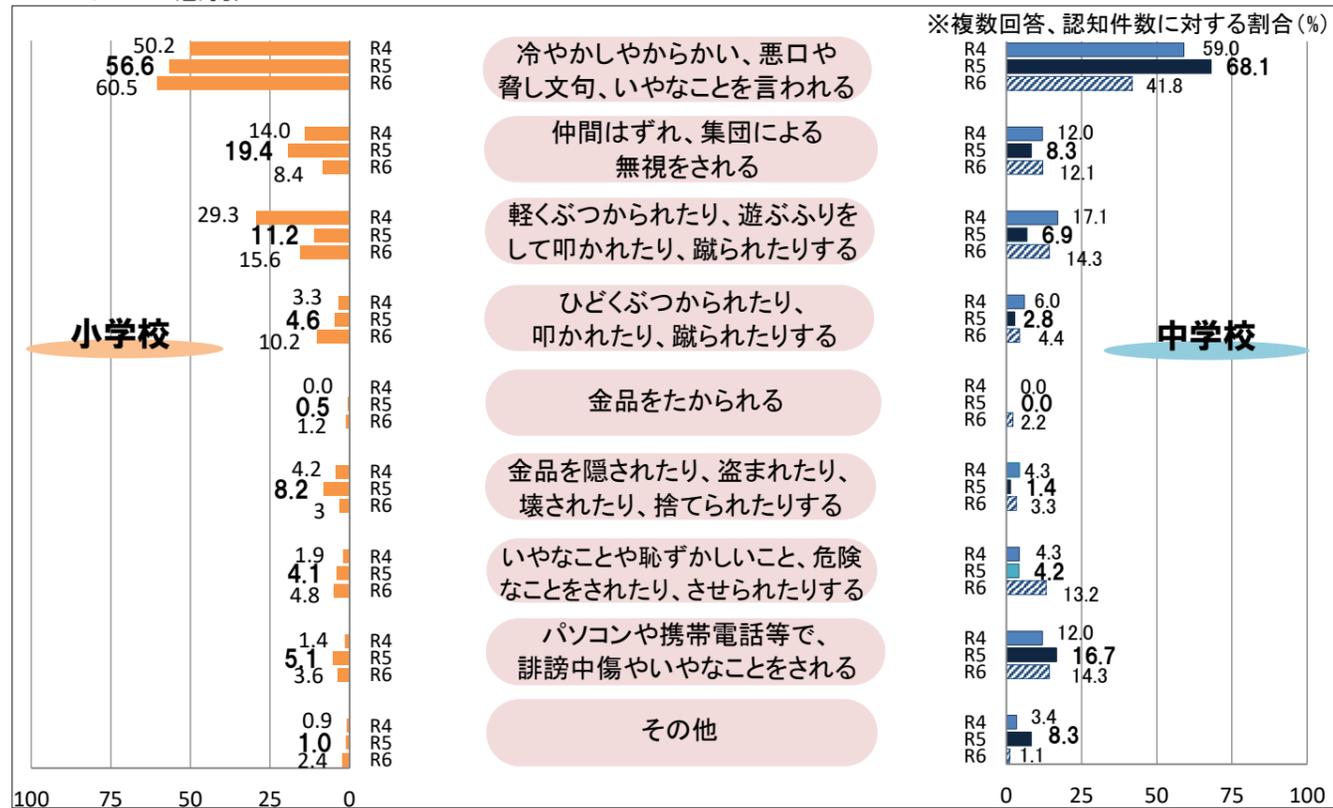


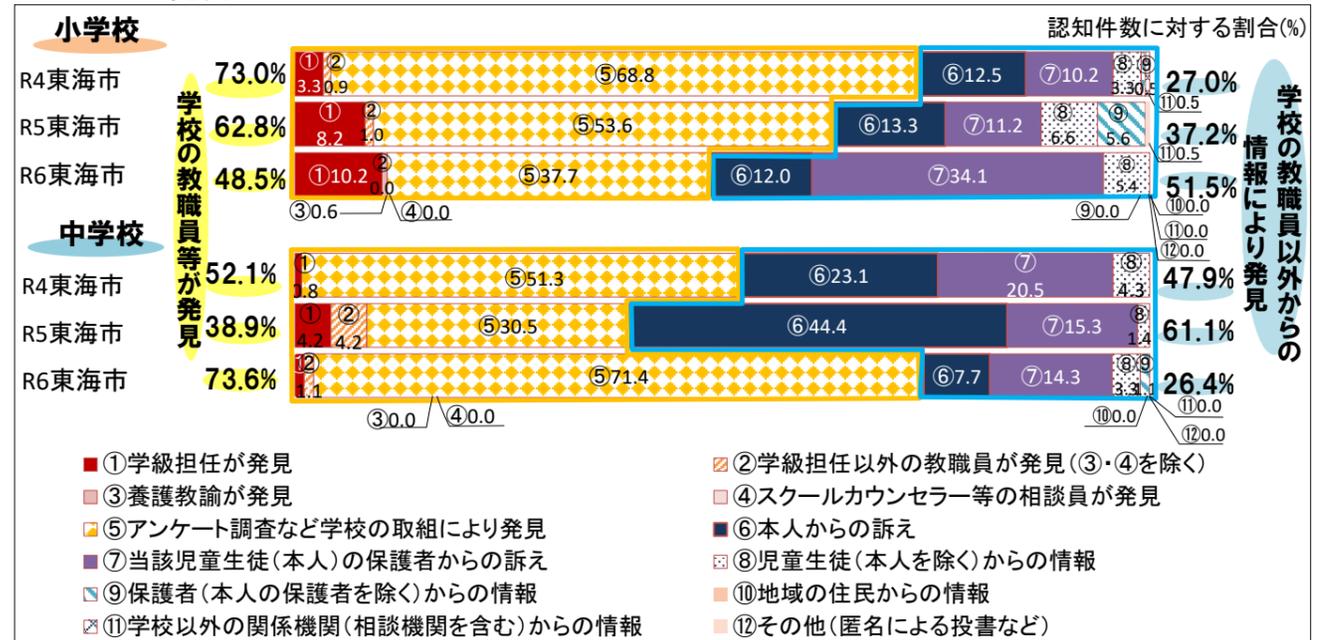
1 いじめの件数・解消状況

| 年度 | 小学校 | | | | | | | | 中学校 | | | | | 合計 | | | | | |
|----------|------|----|----|----|-----|----|----|--------------|-------------|------------|------|----|----|----|--------------|-------------|------------|------|--------------|
| | 認知件数 | 内訳 | | | | | | 解消済 | 解消に向けて取り組み中 | 他校への転校、退学等 | 認知件数 | 内訳 | | | 解消済 | 解消に向けて取り組み中 | 他校への転校、退学等 | 認知件数 | 解消済 |
| | | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | | | | | 1年 | 2年 | 3年 | | | | | |
| R1(2019) | 120 | 13 | 25 | 16 | 12 | 39 | 15 | 70 (58.3%) | 50 | 0 | 175 | 82 | 64 | 29 | 139 (79.4%) | 36 | 0 | 295 | 209 (70.8%) |
| R2(2020) | 256 | 53 | 42 | 46 | 40 | 36 | 39 | 224 (87.5%) | 32 | 0 | 160 | 97 | 37 | 26 | 133 (83.1%) | 27 | 0 | 416 | 357 (85.8%) |
| R3(2021) | 424 | 62 | 57 | 84 | 103 | 58 | 60 | 382 (90.1%) | 42 | 0 | 123 | 64 | 45 | 14 | 101 (82.1%) | 22 | 0 | 547 | 483 (88.3%) |
| R4(2022) | 215 | 30 | 40 | 42 | 36 | 39 | 28 | 193 (89.8%) | 22 | 0 | 117 | 62 | 34 | 21 | 103 (88.0%) | 14 | 0 | 332 | 296 (89.2%) |
| R5(2023) | 196 | 26 | 33 | 35 | 39 | 30 | 33 | 169 (86.2%) | 27 | 0 | 72 | 35 | 20 | 17 | 57 (79.2%) | 15 | 0 | 268 | 226 (84.3%) |
| R6(2024) | 167 | 20 | 28 | 31 | 21 | 42 | 25 | 139 (83.2%) | 28 | 0 | 91 | 53 | 28 | 10 | 81 (89.0%) | 10 | 0 | 258 | 220 (85.3%) |

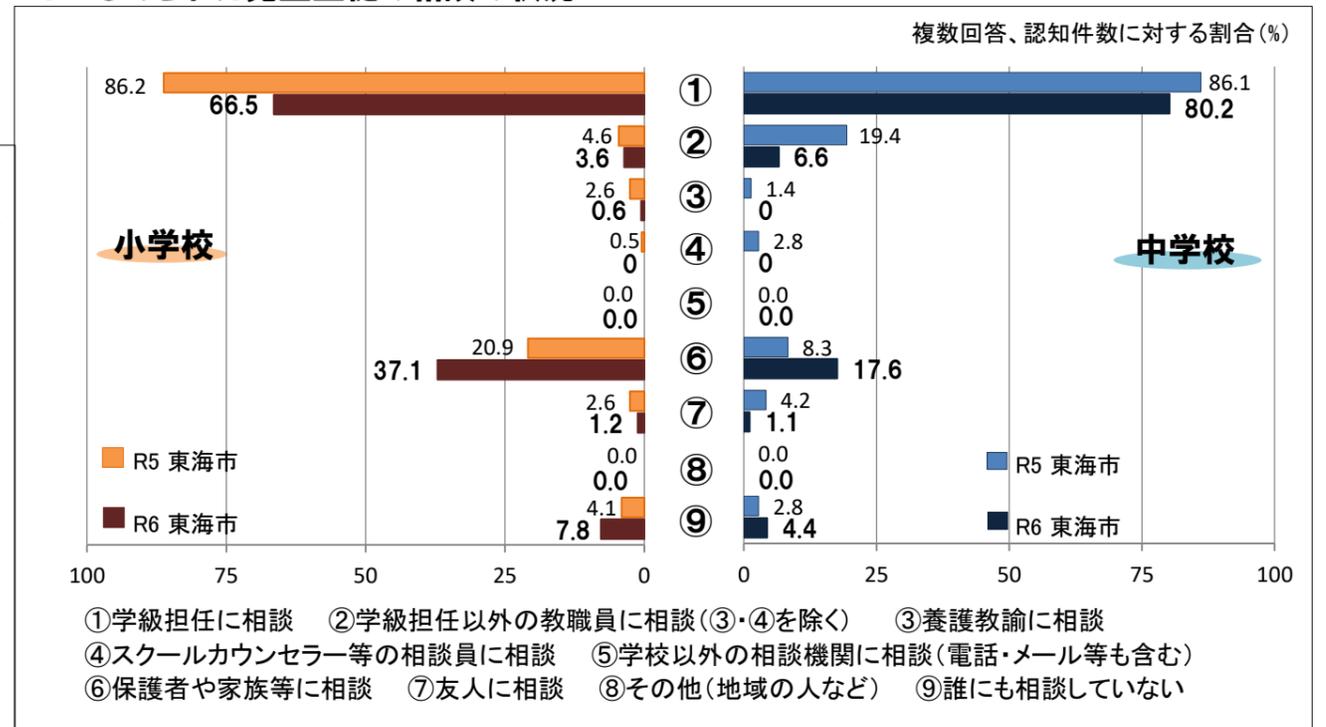
2 いじめの態様



3 いじめの発見のきっかけ



4 いじめられた児童生徒の相談の状況



【いじめ防止等対策委員会の意見等】

○アンケートでいじめ等を教えてくれる生徒は、担任との関係性がよいと考える。また、アンケートの中で、心の相談員や養護教諭に相談したいという項目があるため、アンケートでの発見の割合が増加しているのではないかと考える。

○生徒の指導の中で、被害生徒が加害生徒に指導してほしいと訴えるケースがある。その場合、被害生徒が担任ではなく保護者に訴えることが多い。

○小学校で保護者からの訴えによって発見するケースが多いことについて、学校がいじめを学校で発見できないまま、児童を帰宅させてしまうことは大変申し訳なく感じる。しかし、保護者が児童の話聞いていただき、学校に連絡いただくことはありがたいことだと考える。

○市内小学校の中で、「あのねポスト」を設置し、児童がスクールカウンセラーに直接手紙を書いて相談できるという取組をしている。また、SNS相談や電話相談の案内や通知がある際は、児童に丁寧に紹介し、どこでも相談できるということを日頃から伝えている。

○スクールカウンセラーの面談においても、事を大きくしたり、加害側に言ったりしないほしいという相談が少なくない。

○スクールカウンセラーや臨床心理士の研修会の中で、児童生徒が辛い問題や生きづらさを抱えながらも、人にヘルプを出せない児童生徒が多いという話があった。

○ヘルプを出せない児童生徒が、自分でなんとかしようとする行為が自傷行為になってしまうのではないかと懸念している。

○学校の中でヘルプを出しても、その結果が児童生徒自身にとって、よかったことだと結びつかないと相談しても聞いてもらえないと感じてしまい、せっかく出した援助要請を引き下げしてしまうことにもなりかねない。

○スクールカウンセラーが加害児童生徒の支援を行うことは少ないが、加害児童生徒がいじめにいたる背景や経緯、思いがあるはずである。そこをうまく解消する必要があり、解消しないままであると、また違うかたちで問題行動として出てきてしまうのではないかと懸念している。

○アンケートを実施する際、書き込みが多いアンケートよりも該当する項目に丸をうったりチェックしたりする形態の方が、他の児童生徒の目が気になる児童生徒にとっては有効である。

○小学校では、発達段階において「いじめ」という認識がまだもてていない時期かもしれない。

○「いじめ」というだけでなく、大人は視野が狭くなるのではないかと懸念している。児童生徒が何か訴えてきた場合、その背景に何が原因なのかを確かめることが大切ではないかと懸念している。

○「思い」はなんだろうと考える必要がある。

○アンケートの結果から、児童生徒の変化に気付ける余裕が教職員にあるのだろうかと感じる。